



傳 説

三 つ

一、本所の置いてけ堀

昔本所にこんもりした樹にかこまれて大きな池がありました。この池は魚が大變釣れるので、釣の好きな人が集つて來ましたが、どういふわけだか歸る頃になると、どこからともなく、「置いてけ、置いてけ」といふ聲が聞えて、びくの中の魚は皆何時の間にか無くなつてしまひました。たうとう人々は此の池を「置いてけ堀」といつて氣味惡がつて誰も釣に行くものは無くなつてしまひました。

或日小川さんといふ人が釣道具を持つて、ぶらり〜と此の池にまゐりました。一本の柳の木の下のだ度好い石に腰を下し、釣糸を垂れました。面白い程魚が釣れました。小川さんは煙管を出して、一服しながら澤山釣れた事を喜びました。びくの中には魚がびく〜跳ねてゐます。ふと

「置いてけ」と云ふ聲が聞えました。「おや」と小川さんは振り返りました。何も居ません。「氣のせいかな」小川さんはボンと煙管をはたきました。

「置いてけ、置いてけ」と又聞えます。「をかしいぞ」小川さんは、びくから目を離さず、あたりに氣をくばりました。けれども何時までたつても何事もありませんので、又糸を垂れて釣に氣を取られました。しばらくして、ふとびくを見ると、半分程魚は減つて居りました。小川さんは今度ば夢中になつて、お眠りをしてゐるふりをして、びくの方に一生懸命注意をしてゐました。其の時一匹の狸がすばやく出て來て、びくから魚をつかみ出しました。小川さんは跳びかゝつて、「已れ狸め」といつてさんぐに打ちたたきました。

狸は泣きながら木蔭へ逃げて行きました。小川さんは釣

道具を片付けて家に歸りました。

其の夜、小川さんは晝の疲れでぐつすり眠りましたところ、眞夜中に、「小川、小川」と呼んで、とん／＼戸をたたく者があるので、不思議に思つて、兩戸の隙からのぞくと、大きな狸が逆立をして、太い尻尾でとん／＼と戸をたたくてゐるのでした。小川さんは、「さては晝間の狸が仇討に來たのだな」と思つて、そのをかした狸の姿に思はず噴出しました。兩戸をがらりと明けると狸はころげる様に逃げて行きました。

其の後置いてけ堀には、狸は出なかつたと云ふ事です。

此の話は私の小さい頃お祖母様からよく聞かされたものです。置いてけ堀が今の本所のどの邊に當るか、それはお祖母様も御存じないさうです。(眞生子)

二、河童の恩返し

今、南千住に有名な骨接の醫者があります。此の醫者が骨接の名醫になつたのには次のやうな話があるのです。

昔一人の百姓がありました。或日自分の飼馬を河岸につ

ないで歩いて、ほかへ用達に行きました。此の河には大變惡戯者の河童が居りました。此の時ものこ／＼と出て來て馬の手綱をしつかりと自分の手にしぱり附け、河中に引張り込まうと致しました。馬は大變驚いて、大あばれにあられて、どん／＼厩の方へ駈出しました。河童は手にしつかりと手綱がしぱり附けてあるので、何でたまりませう。其の儘づる／＼と引きづられて、厩へ着いた時には、手の骨は目茶々々に碎けて、おまけに頭の上の水はすつかりこぼれてしまつて居りました。此の頭の上の水は、河童に取つては命から二番目に大切で、此の水が無くなれば、河童は氣力がすつかりなくなつてしまふのです。それで河童は痛さうに、碎けてぶらりと下つた手をさすりながら、ぐつたりと厩の隅に寝てをりました。

一方百姓は自分のつないで置いた馬が見えないので、急に家に歸つて見ると、馬が異様な鼻息をしてゐます。よく見ると、厩の隅の方に一つの怪物がうごめいてをります。驚いて打殺さうとすると其の怪物は兩手を合せて、

「お助けを、どうぞお助けを。お禮に骨接ぎの術を教へて

上げますから、どうぞお助け下さい」

と頼みます。よくよく見ると、それはあはれな姿の河童なので、もとく情深い百姓は可哀想に思ひ、助けてやりました。河童は喜んでお禮に骨接ぎの術を百姓に教へました。

かやうな事から、此の百姓は骨接ぎ醫者となり、其の家は今日の如く名醫として榮えるやうになりました。(昌子)

三、洗足池の主

私の家から四五町の所に洗足池といふ池があります。昔日蓮上人が行脚して武藏野の一角に來た時、あまり疲れたので一休みしようと思つて不圖傍を見ると、一軒の寺がありました。上人は法衣を松に掛けてお寺に上らうと草鞋の紐を解きました。野中の寺の事とて、足を洗ふ水も無く、仕方なしに松蔭の水溜で洗はうとなされました。すると水溜が俄に泉と變じて混々と清水が湧出し見る見るうちに、きれいな立派な池になりました。上人は此の池で足を洗つて寺に上り休息せられたと言ふことであります。

その池が洗足池と呼ばれて、今も漫々と水を湛へてをるのであります。池畔には老松が生茂り、東京近郊に風光明媚を誇る一名所となりました。

かやうの名所も近年釣をする人々や近所のいたづらな子供等の爲に散々に荒されるので、池の主が怒を發し、毎夜物凄いうなり聲を立てるやうになりました。その聲は牡牛のうめき聲にも似てをり、又古井戸の水を汲むポンプのきしむ音にも似通つてをりました。これを聞いた人々は無氣味さにふるへ上りました。そして御祈禱をしたり、お清めをしたり、ひたすら池の主の怒をなだめることに力めました。併し一向にきくめは見えず、益々物凄いうなりは激しくなるばかりなので、青年團が繰出して、たとへ池の主が怨靈であらうと妖怪であらうと、かうなつては正體を見なひでは承知が出來ぬと、大勢で探検にかゝりました。さてつきとめて見ると、それは怨靈でも妖怪でもなく、池の主は一匹の食用蛙でありました。

人々はすっかり安心して、春は花見、夏は船遊び、秋は秋の行樂に遊び興じるやうになりました。(昌子)